

白衣の指先



かのえなぎさ

illustration

01

史堂權

白衣の指先

《立読み版》

かのえ なぎさ

イラスト 史堂 權

危うく出そうになったため息を、寸前のところで呑み込んだ高坂^{こうさか}かまら^やは、弱輩者が座するには少々高価すぎるイスの上で身じろぎする。

居心地悪そうな柁哉の様子に気づいていないのか、デスクの正面に立った事務部長は、苦みばしった表情で報告——という名の愚痴をこぼし続ける。

「とにかく、何度も院長にも頼んだのですが、予算内の裁量は病院に任されているとはいえ、その予算のアップに関しては、理事会が決めることだと言われるだけで。いえ、わたしもそのことは、よくわかっているんです。ただ、現場の意見をもう少し吸い上げてほしいわけでした……」

予算の話だけで腹いっぱいになりそうで、^{たま}堪らず柁哉は片手を上げて事務部長を制する。

「わかりました。予算決定会議はまだ先ですが、理事長に話しておきます。そのためにも、提案書の提出をお願いします」

^{きよせ}清瀬総合病院の理事室にこもり、各部から上がってくる書類に目を通し、理事会に提出する報告書を作成しながら、誰もが納得するような予算案を考える。それが、柁哉の主な仕事だ。

^{ひやくじかい}三十二歳にして、^{ひやくじかい}社団医療法人・百慈会の最年少理事である柁哉は、この一年間、^{きよせ}清瀬総合病院に常勤している。大きな病院だけあって、日々発生する事案を処理するだけでもけっこうな仕事量となり、

週に一、二度顔を出すだけでは、到底処理が追いつかないのだ。

もちろん柁哉としては、もう一つの肩書きである経営コンサルタントとしての経験を積むために、腰掛け感覚で理事を引き受けたつもりはない。暇で時間を持て余すよりは、歓迎すべき状況なのだろう。

そんな柁哉を理事に抜擢した理事長——柁哉の父親は、よほど張りきったのか、柁哉が快適に仕事に励めるようにと、理事長室の隣にわざわざ立派な理事室を設けてくれた。ただしこれは、親バカ故の暴走ではない。

社団医療法人・百慈会は、地元の名士である高坂家や、その親族たちが中心となって運営している組織だ。現在四つの病院と二つの福祉施設を経営しており、どの施設にも理事たちが丹念に目を配っている。そして現在、新たな病院を建設するため父親は奔走しており、多忙をきわめていた。

そんな父親の穴を埋めるのが、理事であり、息子である柁哉の役目となっているのだ。

医師としても有能な父親は、それ以上に経営者として傑出した人物だ。今後、さらに百慈会を大きくする目標を掲げている以上、自分の代理ともいえる柁哉を病院の中心に据えておきたいと考えたのは当然だ。

その自覚があるからこそ柁哉は、事務部長の、最低限の礼儀は保ちつつも、遠慮ない愚痴にもつき

合っているのだ。

ようやく予算の件を納得して、このまま理事室から退室するかと思いきや、事務部長はいくらか声を潜めて新たな話題を切り出した。

「これは本来、診療部……というより、外科医局で収めておくべきトラブルなんですが——、いや、トラブルというのは大げさでして、ちよつとした感情の行き違いから生じて、こじれているという事柄で……」

それを総じて、トラブルと呼ぶのではないか。柗哉は心の中でささやかに反論する。

「……先週から、外科医局内がごたついている、という噂話は耳にしています。ただ、診療部や看護部で何かあったときは、院長にお任せすることになっています。医者でもないわたしが口を挟めば、反感を買うことになりますし、理事長もそういう方針です」

「この場合むしろ、経営側の方が間に立っていただいたほうが、角が立たないといえますか……。なんといっても、〈彼〉を招いたのは理事長ですから」

事務部長の曖昧な物言い、柗哉は大体の事情は把握した。口を挟まないからといって、現場の問題を見過ごしていいわけもなく、情報収集だけはしっかり行う必要がある。

病院内の人間関係を把握し、潤滑剤としての役割も柁哉には求められている。理事室でひたすら書類仕事をこなし、数字を組み立てるだけでは、現場で働く人間は不満を抱く。必要があれば、現場にも介入しなければならぬ。

デスクの上で指を組んだ柁哉は、低い声で問いかけた。

「――それで、トラブルとはなんですか？」

病棟の廊下を大股で歩く柗哉の姿を、患者だけでなく、医師や看護師までもが物珍しげに眺めている。スーツを身につけているとはいえ、見舞い客とも、出入りしている製薬会社の社員（MR）とも明らかに雰囲気が違う柗哉は、昼間の病院内を歩くとやけに目立つのだ。若い理事ということで、それだけでなくも好奇の目に晒さらされることは多い。

人が多い昼間は、できることなら理事室にこもっておきたいところだが、そうもいかない。

さきほど事務部長から聞かされた話を思い出し、柗哉は意識しないまま唇をへの字に曲げていた。

柗哉がこの病院に常勤することが決まったのとほぼ同時期、父親が院長を説き伏せて雇い入れた医者がある。若いながらも有能な心臓外科医で、アメリカ留学から戻って大病院に勤めていたらしいが、どういう経緯があったのかは知らないが、父親が清瀬総合病院にヘッドハンティングするに至ったのだ。

よほど魅力的な条件を提示したのだろう、と普通は考えるだろうが、柗哉は違う。断言してもいいが、若くて有能な心臓外科医は、大病院から厄介払いをされたのだ。それを拾ったのが、人材に対して貪欲な父親だった、と考えている。

ふっとため息をついた柗哉は、エレベーターホールに飾られた鏡に目を向ける。そこには、神経質そうな容貌の男が、眉をひそめて立っていた。柗哉自身だ。

さりげなく視線を逸らし、シワの刻まれた眉間を指先で押さえる。平常心で仕事をこなすよう心がけているが、今は少し機嫌が悪い。

実はさきほど、外科医局に内線をかけ、トラブルの原因となっている『若くて有能な心臓外科医』と話そうとしたのだが、不在だった。そこで、医師や看護師が院内で携帯しているPHSを鳴らしてみたら、電源を切られていた。

院内放送で理事室に呼び出すのはばかられ、結局、桎哉から出向くことにした。看護師に聞いて、居場所の見当はついていた。

エレベーターで一階に降り、救急入口から外に出る。途端に冷たい風が吹きつけてきて、桎哉は肩をすくめて歩き出した。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

白衣の指先

《立読み版》

発行日 2012年2月24日

著者名 かのえ なぎさ

イラスト 史堂 權

発行所 【MILK-CROWN】
ミルククラウン

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Nagisa Kanoé 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。